JAFスポーツWEB

2019JMRC西日本ジムカーナフェスティバルin九州［JAF公認No.2019-5040］

開催日：11月23～24日　開催場所：スピードパーク恋の浦　格式：準国内　主催：RTCR［クラブ登録No.加盟40056］

フォト／谷内寿隆　レポート／ JAF スポーツ編集部

B3クラスは四国の仙波秀剛選手が2本ともベストを奪って快勝した。

四国代表、仙波秀剛S2000、激戦区B3クラスを制す

2019年のJMRC西日本ジムカーナフェスティバルは11月23～24日の2日間、福岡県のスピードパーク恋の浦で開催された。

競技は、PN部門が2クラス、B部門が4クラス、SA部門が3クラス。そしてレディスクラスを加えた全10クラスで競われた。天候は朝は不安定でウェットの中、スタート。しかし雨は止んで徐々に路面は乾き始め、第2ヒートでは全クラスともにタイムアップ傾向を示して、結果的には2本め勝負となった。

今回、最多エントリーを集めたのは、RWD車両が集ったB3クラスで13台が覇を競った。第1ヒートでは地元九州の菅智資選手がそれまでの暫定ベストを2秒も縮める1分50秒331を叩き出してトップに立つが、ラストゼッケンの四国チャンピオン、仙波秀剛選手が1分49秒158と断トツのタイムでベストを更新して首位で折り返した。

注目の第2ヒートでは、各選手、あっさりと1分50秒の壁を破って仕切り直しとなる中、菅選手が1分47秒台に入れ、続く同じ九州勢の小石孝浩選手が1分46秒台に突入するも、こちらは痛恨のパイロンタッチ。しかし迎えた最終の仙波選手は1分45秒411までタイムを詰めて、勝負を決めた。

「タイム差ほど余裕のある走りではなかったです」と仙波選手。「後で考えれば、まだまだもっと行けたかなというところはありました。四国のコースにはない、下りながらのブレーキングのセクションもあったので、ともかく難しかったです」。全国的に見れば多彩なコースに恵まれている、四国地区育ちのドライバーにとっても、この恋の浦は、なかなかに応用の効かない難コースだったようだ。

四国勢に負けじと健闘を見せたのは中国勢。PN1クラスでは、廣瀬健選手と児玉直弥選手が1-2フィニッシュを飾った。第2ヒートでは児玉選手に0.3秒差と詰め寄られたものの、2本ともベストを出して快勝の廣瀬選手は、「1本めと2本めのコンディションが変わって難しかったですけど、何とかそれぞれの路面に合わせた、いい走りができたと思います」とひとこと。

「恋の浦は5年前の西フェス以来、2回めですけど、中国地区にはない感じのコースなので、上段も下段も難しいコースという印象は変わらないですね。ただ昨日から生タイムはトップだったので、いい感じをキープできたのが大きいと思います」と振り返った廣瀬選手は、実は9月から転勤のため、九州に在住。「2020年は九州の地区戦で勝負できるようなスラローマー

1. SA1は井上洋選手がオーバーオールウィンを飾る好タイムで優勝。*2.* Lクラスは地元九州の白川希選手が快勝した。*3.* B4は近畿の日野良一選手が快勝した。

4. B4で2位の坂田龍雄選手。**5.** SA1で2位の佐藤一樹選手。**6.** 四国の佐伯希選手がSA3で2位獲得。**7.** Lクラス3位は砂田光恵選手。**8.** 早田洋介選手はPN1で3位。**9.** PN2で3位入賞の児玉淳一選手。**10.** 池武俊選手はB1で3位。**11.** B2で3位の伊藤雄二選手。**12.** 堀央尚選手はB2で3位。**13.** 参加12台と激戦区となったPN2クラスは地元の関岡優季選手が逆転勝ちを収めた。**14.** K CARマイスターが集ったB1クラスは近畿の藤林伸吉選手が優勝。**15.** PN1は廣瀬健選手が2本ともベストで快勝。**16.** B2はインテグラセダンを駆ったたにもと章則選手が優勝。**17.** SA3はヒート1でミス連発の中村孝選手がヒート2でごぼう抜きの逆転優勝をさらった。**18.** FD3Sのホットバトルとなったが SA2は近畿の奥浩明選手に軍配。**19.** Lクラス表彰の各選手。**20.** PN1表彰の各選手。**21.** B4表彰の各選手。**22.** SA1表彰の各選手。**23.** SA2表彰の各選手。**24.** SA3表彰の各選手。**25.** PN2表彰の各選手。**26.** B1表彰の各選手。**27.** B2表彰の各選手。**28.** B3表彰の各選手。**29.** Lクラス2位入賞の清水浩子選手。**30.** PN1児玉直弥選手は2位入賞。**31.** PN2で2位入賞は勝野佑紀選手。**32.** 豊本将希選手はB2で2位。**33.** B2で2位の菅智資選手。**34.** B1で2位入賞は坂井一弥選手。

になりたいですね」と決意を語った。

一方、今回のオーバーオールウィンを決めたのはSA1クラスの井上洋選手。ただ一人、1分40秒の壁を破る1分39秒350を叩き出した。九州を代表するインテグラマイスターだ。

「39秒台を出さないと勝てないと思ったので、タイム的にはひと安心しましたが、まさかオーバーオールを取れるとは思わなかったので、自分でも驚いています。直線が長かったら、やっぱり4WDには勝てなかったと思いますけど、それでもこの結果は自信になります」と笑顔の井上選手。コンディションの大きな変化は、走り慣れた地元勢も多いに頭を悩ませたという。

「2本目の路面が直前になるまで、ドライになるのかウェットのままなのかが予測できなかったんですが、そこは晴れると見込んでフロントだけドライタイヤに変えて、後ろはウェットのまま、走りました。結果的には最初からグリップがあったので正解だったと思います。実は昨日、今日の天気を睨んで、ウェットセッティングでドライタイヤを履いてみたら、そこそこ乗れたので、『どっちのタイヤでも行ける』という感触を持って今日に臨んだのが、大きかったと思いますね」と勝因を語った。

なお、恒例の地区対抗戦は2クラスで優勝、7名のドライバーが表彰台に上がった中国地区が、栄えある優勝旗を持ち帰ることになった。

地区対抗戦を制したJMRC中国チームの各選手。